

# 第29回 日本篆刻展開催

全国規模の篆刻のみによる唯一の公募展「第29回日本篆刻展」が、5月14日から19日まで大阪天王寺公園内の大阪市立美術館地下展覧会室で開催された。



作品を熱心に鑑賞する参観者

# 日本篆刻家協会会報

第11号 平成25年10月31日発行  
発行：日本篆刻家協会  
563-0032 池田市石橋2-2-10-203  
TEL 072-760-3852 FAX 072-760-3853  
E-mail : info@n-tenkoku.jp



展覧会は公募作品八十八点に四十都道府県からの会員・役員の作品計千百点余が二室に分け壁面展示された。特別展観として「殷周秦三代の文字」と題して会員所蔵の名品が壁



面とケースで展示された。十九日には尾崎蒼石理事長により、殷周の青銅器、明代の拓本から近代出土の青銅器原拓等特別展観の解説が会場で行われ、大勢の参加者が耳を傾けた。

上左：ガラスケースに納められた特別展観  
上右：会員の作品のならば会場  
下右：列品を解説する尾崎理事長（中央）  
下中：壁面と台上の特別展観文字資料  
下左：特別展観殷周の青銅器

**審査**

第二十九回日本篆刻展の審査会が三月二十三日・二十四日、大阪マーチャングイズマート会議室で行われた。理事以上の役員を除く一〇一二点を対象に厳正公平な審査により梅舒適賞四点、日本篆刻展大賞一点、同準大賞九点、同優秀賞二七点、同奨励賞八七点、特選六一点、秀作九一点、会員推薦賞八八点が選ばれた。

**主な受賞者**

梅舒適賞（評議員）

田原呉山 稲垣華扇 下井嶺葉 横山龍児

日本篆刻展大賞（常任委員）

畔原裕美

日本篆刻展準大賞（常任委員）

山口敦子

中田東光

野中紫光

日本篆刻展優秀賞（常任委員）

近藤胡蝶

朝倉豊岳

安宅霞溪

宇都宮蘭雪

東住紅華

樋口桃園

松田美津子

小森香苑

金森喜彦

工藤芳悦

石留之然

石川無外

破名城泰久

鈴木城山

馬景泉

藤塚嶋人

小澤博石

佐藤正明

垣内誠峯

館智舟

渥美抱葉

松本弘碩

会田慶子

瀧上紀翠

小谷知洲

西山進

理事長・副理事長による梅舒適賞の選考



慎重に審査に当たる審査員

全国からの大勢の参加者



謝辞を述べる大賞受賞の畔原裕美氏



梅舒適賞受賞者

左から横山龍児、下井嶺葉、田原呉山、稲垣華扇の各氏



会員代表に賞状を贈る大村副理事長



あいさつをする尾崎理事長

**授賞式**

五月十九日、ホテル大阪ベイタワーで開催され全国から二百八十八人が参加した。公募、会員、委員の部は各賞ごとに受賞者が紹介され、大村高陵副理事長から代表者に贈られた。常任委員、評議員の部は尾崎蒼石理事長から各人に手渡された。

**出品者懇親会**

引き続き出品者懇親会が開催され大勢の参加者が受賞者を祝福した。来賓紹介、祝辞、新役員昇格者紹介が行われ、全国からの参加者が歓談、交流を深めた。



乾杯で受賞者を祝福

# 第五回 日本篆刻家協会役員展

開会あいさつする尾崎理事長



会場の古河市篆刻美術館入口



役員展会場内（石造り蔵の内部を展示場に改装）



中庭での開会式

第五回日本篆刻家協会役員展が六月二十九日（土）古河市篆刻美術館で開幕した。平成二十一年に第一回展が開催され、今年は記念すべき第五回展である。当日、午後一時三十分から盛大に開会式が挙行された。前日の天気予報を覆し、真夏を思わせるような暑さの中、展示室中庭において役員、会員等大勢の参加者が集うなか白井篆刻美術館長の司会のもと式が進行された。

開式の言葉を平田副理事長が、次に主催者を代表して尾崎理事長が挨拶し、篆刻を通じて文化の向上に寄与していきたいと熱い思いを語った。また本年百一歳の委員、安田佳舟氏（千葉県館山市）も出席しており、篆刻をする人は長生きするなどユーモアを交えての挨拶に会場も和やかな雰囲気

記念研究会場は昨年完成したばかりの市地域交流センター（通称・花ももプラザ）



となった。続いて古河市教育委員会教育長代理の三田文化課長の挨拶があり「篆刻の素晴らしさを全国にPRする唯一の美術館である」と力強い言葉で述べられた。役員紹介では理事長、副理事長、多田、市川代表理事、師子堂参事、美術館係長、出席の出品者が紹介された。作品寄贈では尾崎理事長から三田課長に目録が贈呈されたが、今回は、代表理事の中島、喜多、市川三氏の作品が寄贈されるとの紹介があった。その後、尾崎理事長による第五回役員展のタイトル揮毫と出席役員全員から姓名の署名があり、市川代表理事の閉式の言葉で開会式を閉じた。

記念研究会場は古河市のご配慮により、昨年完成したばかりの市地域交流センター（通称・花ももプラザ）において開催された。研究会の講師は平田副理事長、多田、市川代表理事が担当され、印稿や印影を持参した会員等約六十名が参集し、会場は持参した作品の批評・指導を待つ参加者の未知の助言と期待に熱気が溢れていた。

午後二時四十分から阿部評議員の司会により開会し、平田副理事長の挨拶では制作にあたっての「書く」「刻む」行動や篆刻の奥の深さなどについて話があった。引き続き三名の講師の経歴紹介のあと批評会・指導会が開始されたが、参加者は堰を切ったように講師を囲み順番を待った。各講師の個性や指導方法もあり、真剣な質疑応答や笑いや感嘆の声ありで、予定時間もアツと言う間に過ぎた。終了時に多田代表理事から講評があり、その中で「①古典をやりながら新しいものを作る。②篆刻は住宅と同じ、強度な構造的で一本の足をしっかりと。③空間の処理を考える。」など今後の篆刻への取り組みの示唆があった。参加者も充実した時間を過ごすことができ、これからの作品制作への糧になる満足度のいく研究会となった。

（杏壇篆会 青木雄山）



指導に当たる役員（左から平田副理事長、市川・多田代表理事）

# 第六回中央研究会

平成二十五年八月二十四日(土)～二十六日(月)の三日間、シーサイドホテル舞子ピラ神戸で盛大に開催され、全国から一七六人が参加した。

上：熱心に講義を聴く全国からの参加者 下右：尾崎理事長から分刻課題の説明



講義する中島代表理事



と鑑賞する時間と鑑賞する時間を加者全員じっくりと鑑賞する時間を

文字(五、六文字もある)が割り当てられた。また尾崎理事長が二十人展のメンバーとなられたとおめでたい発表もあった。

次に中島春緑代表理事による「中国古印材(鑑賞と解説)」の講義があった。演壇前には先生の持参された貴重な印材が展示された。



正午過ぎから受付の後、午後一時三十分開会。尾崎理事長が挨拶。篆刻の勉強の仕方や取り組む姿勢について、また自分でやってみることに大切さを強調された。分刻課題の作品制作について説明があり、今回は詩経の「結婚のうた」「棄婦の歎き」を分刻するもので、参加者に四

とり、鑑賞して再度講義を聴く形式だったため、印に対する見方や印材の特徴など興味深く、百聞は一見にしかずで、理解を深めることができた。講演資料には色別・産地別印石表や石の特徴、稀珍品一覧等とともに参考文献が紹介されている。先生のコレクションである語石樓蔵の田黄や芙蓉、鶏血、水晶凍など百十五



貴重な印材を心ゆくまで鑑賞



演壇前に展示された先生の持参された貴重な印材

類の展品目録が添えられており分かりやすかった。講義終了後も貴重な印材を心ゆくまで鑑賞することができた。講義後、十五時三十分からは宿泊室へ移動して各自制作に入った。

初企画の「なぜか鑑定団」



夕食後、初企画で「なぜか鑑定団」が開催された。これは、参加者が持参した文玩品を、先生五人（山下・尾崎・大村・平田・真鍋各先生）が鑑定家？として、その作品の真贋を判定するというもの。例えば、古道具屋さんから祖父が買ってきたとされる有名な中国作家の作品の鑑定を依頼する。本人の希望価格を言った後、鑑定家である先生方が印などを細かく見て真贋を決め、価格を提示するという形式で進められた。鑑定途中の話や決め手となる事柄の発表などあり、興味深く参加す

る。鑑定途中の話や決め手となる事柄の発表などあり、興味深く参加する。鑑定途中の話や決め手となる事柄の発表などあり、興味深く参加する。鑑定途中の話や決め手となる事柄の発表などあり、興味深く参加する。



印社代表者会議

尾崎・大村・平田・真鍋各先生による添削指導



ることができた。山下常任顧問からは、古墨についての解説と参考品の展示があった。幸運な人がその古墨を贈呈されることもあり、楽しい行事であった。

二日目は朝食の後、印社代表者会議が開かれた。午前中は各自作品制作が大広間舞子の間では尾崎・大村・平田・真鍋各先生による添削指導が行われた。他の先生に指導を受けることはこの会に参加しなければできないことであり、協会の仲間が自由に様々な先生方と話をし交流することで、作品の幅を広げることができ仲間意識も深まる。

午後は「篆書の創作」と題して、多田酒居、中島、小、尾崎、山下各先生が篆書作品を各人数枚程度壇上で公開揮毫された。先生方の揮毫の様子が、巨大スクリーンに映し出され、参加者はその迫力のある書き方や、筆遣いなど作品の仕上がりや熱心に見入っていた。作品は会場内に展示され、仕上がった作品を直に見ることができたので、線

じゃんけん勝ち抜きで篆書作品が参加者に贈呈される



興、じゃんけん勝ち抜きで篆書作品が景品として参加者に贈呈された。さらにカラオケでは日頃あまり見られない先生方のパフォーマンスも見られ大いに盛り上

の変化や作品の魅力を深く味わうことができた。夜の大変有意義な講習となった。その作品は、夜の懇親会時に参加者に贈呈されるのと発表があり、さらに見入っていた。一六時三十分からは協会企画委員会が開催された。懇親夕食会では、各種公募展での成績が披露され入賞者が紹介された。余



巨大スクリーンに映し出される「篆書の創作」先生方の揮毫の様子

がった。

三日目は、チェックアウト後、分刻課題を提出し舞子間に集合した。真鍋副理事長から篆刻作品の仕上げ方について注意があった。表具屋任せにして周りが落とされすぎている作品や、落款を書いてさらに側款拓も貼ってあるなど重複することは避けること、印は雅号一文字を入れたものを使うのではなく雅号全てをしつかり入れたものが良いこと、雅印は大きすぎたり小さすぎたりしないことなどの話を参考作品の例をあげて説明された。井谷副理事長から西冷印社社員登用試験の報告があり、喜多芳邑先生が合格されたとの発表があった。



並べられた分刻課題作品を前に開会挨拶する尾崎理事長

最後に尾崎理事長の閉会の言葉では、来年の研究会開催は諸事情から期日が早まり、平成二十六年八月二日（土）四日（月）に同じ会場、舞子ピラで開催する予定となった。今年以上に多くの参加者を期待している。参加者はさらに研鑽を積み、多くの人に篆刻の良さを伝えてほしいと話され解散となった。（研究部 山根容園）

西冷印社建社110周年記念入社選抜試験会場



## 西冷印社建社一一〇周年 記念入社選抜試験の報告

国際交流部長 井谷五雲

西冷印社建社一一〇周年の本年、新社員になるための選抜試験が行われた。入社試験はまず、中国を八地区、外国は日本の東地区と西地区・台湾・韓国、合計十二地区で予備試験が行われた。本協会は日本の西地区に該当し、評議員以上の役員に応募を呼びかけたところ、三十五人の受験者があった。七月五日に本協会事務所へ寄せられた作品

審査を行なった結果、喜多芳邑代表理事・松本雅至常務理事・東尾高岳理事・井後雅堂評議員の四人が合格し、杭州での本試験を受けることになった。

受験者四人に私が随行し、八月二十一日関西空港から受験のために出発した。

一行は上海でショッピングを楽しんだ後、二十二日夜に杭州に入る。二十三日に受付を済ませ、夜は西冷印社副社長の童衍方先生、理事の余正先生・桑建華先生・呉瑩女士などと夕食会を催した。受験の緊張感をしばし忘れる楽しいひと時であった。試験の二十四日を迎える。

試験会場は杭州市内の人民大会堂。試験に臨んだのは先述の十二地区の予備試験合格者の約百五十人。試験の内容は①篆刻作品二点②書作品一点③筆記試験一点、三つの課題を午前中、約



西冷印社門前の本協会受験者と引率の井谷副理事長（右端）

四時間の間に仕上げなければならない。ドなものもあった。午後、西冷印社幹部先生によつて審査が行わ



入社選抜試験結果発表会場

れ、夕刻に市内のホテルに場所を移して発表が行なわれた。合格者は六人。中国人が五人、そして外国人が一人。その一人が見事わが協会代表理事の喜多芳邑氏であった。発表後の会場は記念写真やにこやかな交歓があちらこちらで行われ、またテレビカメラや新聞記者などが取材に訪れ、合格不合格にかかわらず、全力を出し切つて試験に臨んだ満足感が満ち溢れる華やかで充実した空気に包まれた。

翌二十五日、一行は杭州空港から無事帰国した。新社員誕生を得て、充実した五日間の訪中を略記して報告とする。

## 西冷印社選抜大会に参加して

喜多芳邑

奈良教育大学特設書道科に入学し、書を志して三十五年。呉昌碩に憧れて篆刻を学び始め、西冷印社への思いは募る。研究会や訪中を重ねるたび、篆刻・日本篆刻家協会や梅先生をはじめとする多くの先生方に教えを請い、育て可愛がつて頂いたと思う。高校で書道教員として書に携わってきたことも無駄ではなかったかもしれない。

私にとつては二度目の選抜大会参加となるが、篆刻・筆記試験に加えて書作を午前中に終了するというもので、硬い印材、停電というハプニングはあったものの、気持ちよく受験することができた。本協会参加者はその実力を遺憾なく発揮できたかと思われる。

今回日程が合わず参加できなかった諸先生が多かつた中、幸いにも参加し社員になることができました。舞子ピラで温かく迎えて頂き実感が湧いてまいりました。これも一重に理事長、協



会の諸先生方、会員の皆様、特に訪中団を引率して頂いた井谷副理事長、参加した仲間のおかげだと感謝致しております。

「天地回春律」

役員(喜多芳邑選)



燕安



祥嵐



立女



九成



桂舟

常任委員(堤白遊選)



紅舟



汀華



景雲



智舟



秀風

委員(中村葉舟選)



明



仙華



春冷



瑞碩



翠龍

會員(長谷川綿海選)



矢岳



悅治



匠



梅風



之信

一般(古瀧幽畦選)



顔了



正男



溪州



瑞惠



雅宣

役員(酒居石莊選)



燕安



立女



九郎



正步



尚子

常任委員(松本雅至選)



見聲



芳泉



惠草



韶嘩



汀華

委員(御手洗眉山選)



芳翠



久利江



群蛙



春冷



桂水

會員(伊佐治祥雲選)



浩三



梅風



龍孫



清光



功勝

一般(石原豊玉選)



勝山



幽篁



瑞惠



鈴輪



顔了

役員(土井純司)

古野燕安 名倉克彦 竹内立女 木村容庸 坂正步 武友章知子 藤親尚子 岸村表風 大槻彦裔 原田惠苑 南輝代 堤白遊

常任委員(堀村昇宏)

今西九郎 木村容庸 坂正步 武友章知子 藤親尚子 岸村表風 大槻彦裔 原田惠苑 南輝代 堤白遊

委員(案浦明可)

向畑芳翠 北畑謙之 田原群蛙 森静二 市川桂水 中山翔子 平松清嗣 永井漢舟

常任委員(浦調香之)

木村忠男 石原溪州 松原京子 須田桃苑 遠藤幽篁 松原京子 須田桃苑 遠藤幽篁 松原京子 須田桃苑

一般(木村忠男)

木村忠男 石原溪州 松原京子 須田桃苑 遠藤幽篁 松原京子 須田桃苑 遠藤幽篁 松原京子 須田桃苑

「美淵澤」

五月課題

「蘭質蕙心」

役員(小朴圃選)



容庸



章石



祥雲



青露



蕪安

常任委員(榊原晴夫選)



見聲



紳丘



青桐



宗雄



龍神

委員(伊藤雅夫選)



蘆山



桂峰



清嗣



昌子



惠苑

會員(黒田玉洲選)



雅子



英昭



宏雉



游月



紀久

一般(黄平齋選)



幽篁



晶石



桃苑



守



勝山

〔役員〕 重原祥雲

〔常任委員〕 津田弘碩

〔委員〕 佐藤翠龍

〔會員〕 三枝龍泉

〔一般〕 清水正男

〔役員〕 竹内立友

〔常任委員〕 淺野道男

〔委員〕 荒川紅絲

〔會員〕 若林哲子

〔一般〕 石田幹男

六月課題

「山花拂面香」

役員(多田龍淵選)



早知子



克彦



繁治



泰軒



祥雲

常任委員(堤白遊選)



草翠



紅舟



景雲



誠峯



宗雄

委員(佐川大羊選)



静二



春冷



竹峰



究石



華泉

會員(南岳采雲選)



香之



修一



雅子



悦治



功勝

一般(武井岳峰選)



勝山



靖武



勝竹



溪州



瑞恵

〔役員〕 竹内立友

〔常任委員〕 淺野道男

〔委員〕 荒川紅絲

〔會員〕 若林哲子

〔一般〕 石田幹男

〔役員〕 多田龍淵

〔常任委員〕 堤白遊



七月課題

「吐肝膽」

役員(中島春綠選)



宗里



早知子



祥雲



杏葉



惠苑

常任委員(松本雅至選)



芳泉



汀華



平峰



秀風



蘇碩

委員(中村葉舟選)



嘉信



忠義



康生



翠龍



峻齋

會員(長谷川帰海選)



泰久



怡然



裕進



博則



唯文

一般(古瀧幽畦選)



勝山



碧翠



雅宣



溪州



美智子

〔役員〕

- 吉田宗里 今村董圃
- 武友知子 今西九郎
- 重原祥雲 名倉克彦
- 正和合葉 坂正歩
- 原田惠苑 竹内立女
- 岡田桂舟 渡部芳月
- 古野燕安 計六八人

〔常任委員〕

- 安井芳泉 福本青桐
- 松永平峰 永野草翠
- 丸山蘇碩 番定静山
- 津田秀風 松田碧草
- 丸山蘇碩 奥島紳丘
- 青木雄山 稲垣竹扇
- 山内立女 平井清峰
- 宮本瑞邦 山内紫泉
- 計七二人

〔委員〕

- 伊藤嘉信 井先亮石
- 高橋忠義 長澤廣山
- 月森康生 平松清嗣
- 佐藤翠龍 田原爵蛙
- 小平峻齋 大城容史子
- 池谷宝樹 案浦明可
- 中尾惠至 伊谷昌子
- 計七二人

〔會員〕

- 原田泰久 木田好昭
- 藤田怡然 乙守容子
- 高橋裕進 安保匠
- 伊藤博則 中龍孫
- 兼子悦悠 磯村育治
- 兼守唯文 中井榮子
- 西口巖映 境山正甫
- 中尾惠至 境山正甫
- 大谷浩三 高木啓志
- 計七九人

〔一般〕

- 堤瑞惠 堤瑞惠
- 中島保雄 中島保雄
- 大野勝山 大野勝山
- 國江碧翠 辻本邦子
- 松浦雅宣 酒井守
- 石場溪州 三井顔子
- 鈴木壽子 片岡和子
- 吉田豊 清水正男
- 遠藤幽室 広森勝竹
- 計二六人

八月課題

「點鐵成金」

役員(渡邊和琴選)



早知子



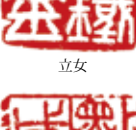
正歩



静雲



立女



吳山

常任委員(榎原晴夫選)



平峰



青桐



紳丘



沙舟



韶嘩

委員(御手洗肩山選)



戲石



明可



香堂



明



蘇西

會員(伊佐治祥雲選)



典惠



史風



正甫



匠



智香

一般(石原豊玉選)



幽篁



碧翠



京子



溪州



鈴輪

〔役員〕

- 名倉克彦 今西九郎
- 坂正歩 古瀧幽石
- 竹内立女 重原祥雲
- 原田立女 遠藤紫子
- 岡田桂舟 淺野祥雲
- 古野燕安 大槻彦高
- 計四四人

〔常任委員〕

- 鈴木惠草 井本敏子
- 松永平峰 垣内誠峯
- 丸山蘇碩 奥島紳丘
- 津田秀風 津田秀風
- 濱口留嘩 稲垣竹扇
- 田中壽江 岡上汀華
- 小澤博石 安井芳泉
- 計五五人

〔委員〕

- 岡崎戲石 木本正明
- 案浦明可 長谷田墨若
- 川久保明 稻葉桂峰
- 藤本蘇西 大城容史子
- 北畑謙之 奥島春治
- 福本剛志 月森康生
- 計七六人

〔會員〕

- 荒井典惠 中村紀久
- 中路史風 武田信信
- 安保匠 木村行石
- 大井智香 浦田早苗
- 橋本游月 三枝龍泉
- 松本矢岳 井上秋鹿
- 計六八人

〔一般〕

- 石田幹男 石田幹男

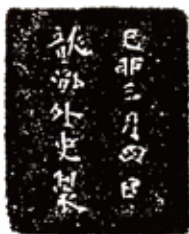
側款の書き方(四)

真鍋井蛙

⑲ 蒼齋 黄小松



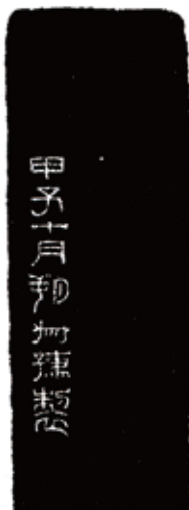
⑳ 居業 丁敬身



㉑ 寶書 河井荃廬



㉒ 龐元濟書畫印 趙攝製



㉓ 蜀石經齋 吳昌碩



㉔ 仲陶 吳讓之



(三) いつ刻したか

—年月日及び年齢の書き方—

年月日は単に数字で記せば事足りるのであるが、そこは文雅な篆刻の世界、様々な言い方があるのでこの項で紹介してみたい。

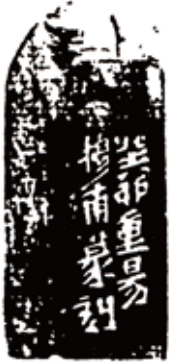
⑲は年月日に年号を冠した例で「乾隆庚子六月十有三日、錢唐黄易謹刻」このやり方は署名と共に最も厳格な書式である。私が先日清水寺貫主森清範猊下に刻した印の側款は次の如くである。

「平成己丑十月二十有五。讃州真昌謹刻」とした。贈る相手によって側款の書き方を変えるというのも文雅ととらえていただきたい。⑳は干支を用いて年月日をいつたもの。年号を記さなくても生卒年から逆算できるので年月日の記載はこれでもよい。私なれば「己丑十月四日休」製⑲は「乙巳六月念九」とだけで署名が無いのは、「宝書」は河井荃廬の堂号が「宝書龕」だからである。念とは廿のことで二十九日に刻したという意である。

⑳ いうまでもないが年月のみでも可。㉑「己未年熙載刻」㉒「缶道人自刻印」の款は印面「缶道人」と重複する為あまり良いとはいえない。このように時を姓名字号の後に配するとき、「時○○」とする場合が多い。私なれば「蛙道人自刻印時己丑」とすればよい。



③⑥ 翁湛言事 黄牧甫



③⑤ 尊古齋 黄小松



③③ 梁鼎芬印 黄牧甫



③④ 念憲 吳昌碩



③② 缶道人 吳昌碩



③① 仲陶 吳讓之



③⑨ 蔣侯 吳昌碩



④① 甄父 趙次閑



④④ 鎮粵將軍 黄牧甫



④② 大谷勝眞 河井荃廬



③③は「著雍困敦正月牧甫篆刻」著雍は十干でいう戌のこと。困敦は十二支の子、したがってこの印は戌子の正月に牧甫が刻したという意である。十干を歳陽といい十二支を歳名という。

癸	壬	辛	庚	己	戊	丁	丙	乙	甲	十干	歳陽
昭陽	玄默	重光	上章	屠維	著雍	強圉	柔兆	蒙旃	闕逢		

亥	戌	酉	申	未	午	巳	辰	卯	寅	丑	子	十二支	歳名
大淵猷	闞茂	作噩	涖灘	協洽	敦牂	大荒落	執徐	單閼	攝提格	赤奮若	困敦		

ここに表をあげておくので組み合わせて年月日を作成するとよい。ちなみに二〇〇九年平成二十一年(己丑)十月に私が印を刻し、側款を入れると「屠維赤奮若十月井蛙篆刻」となる。

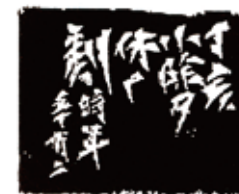
③④「乙酉浴佛日。倉碩」の浴佛日は、四月八日の釈迦の誕生日④「上章攝提格浴佛日休厂刻」③⑤「七夕」七月七日③⑥「重陽」は九月九日をさす。五月五日が端午。一月七日を人日。三月三日



㉔



㉕



㉖



㉗



季	仲	孟	
三	二	一	春
六	五	四	夏
九	八	七	秋
十二	十一	十	冬

を上巳といっているこの人日、上巳、端午、七夕、重陽を五節句という。  
 側款に入れるのに都合がよいのでたとえ七月八日に刻しても「己丑七夕休厂刻」とするのは私だけではあるまい。  
 ㉗などは「丁巳小除夕」は大晦日の夜を除夕・除夜といふ二十四日夜を小除夕という。いづれにしてもこんな時に印を刻すのもオツなもの。㉖「丁亥小除夕休厂刻時年五十有二年末くらいつくり本でも読みたいものである。  
 あとはよく使用する言い方をのべてみる。  
 ㉔「甲子十月朔。叔孺製」この朔はついたちの意。月が始めて蘇生することである。よって十月一日にこの印を刻している。㉕「己丑十月朔休厂製」㉖「戊戌四月初吉」は四月朔日をいう。㉗「丙戌十一月朔後三日」は四日のこと。ちよつとまわりくどいい方。私は五月六日が誕生日なので来年「庚寅五月朔後五日自刻」として井蛙の印でも刻してみよう。㉘二行目「壬午孟冬上浣」は孟冬は十月。上浣は月の始めの十日間。㉙癸巳十二月下浣は終わりの十日間。浣はまた澣にも書く。(十一日から二十日までを中浣という)一月は孟春、二月は仲春、三月は季春と書く。その表をここにあげておくので参考にしていただきたい。(おわり)

展覧会成績

第四回 日展

井谷五雲 喜多芳邑 関路青 提白游 中村葉舟  
南岳某雲 眞鍋井蛙 山下方亭 古溝幽畦 竹内立女

第六七回 日本書芸院

史邑賞(一科審査員)  
古溝幽畦

大賞(二科審査員)  
井後雅堂 中林千影 坂東香璋 古野燕安

特別賞(無鑑査)  
伊藤浄齋 市浦五常 尾原衣香 王丸郁窓 岡上汀華

準特別賞(無鑑査)  
倉野香雨 黒田悦子 竹内立女 仲森蓬園 古田雅風

内田紅楓 幸森倚虹 嶋田杏園 城下江暉 土井純司

西田茜秋 花村秀鏡 平田征男 若山菟川

第五九回 全関西美術展

全関西美術展賞

第二席 中田東光

第三席 中林千影

佳作 安井芳泉

書芸院大賞

下井嶺葉

音川景香 松阪聖岳 中川典子 黒田悦子 白石恭三

鷹取麗水 丹下青風

第三〇回 読売書法展

読売新聞社賞

特選 関路青

井後雅堂 小上玉蘭 丹下青風 高尾高岳 安井芳泉

秀逸 稲垣華扇 和田恵子 北田成磊 串田一運 松井翠香

八幡磨子 安部祥庵 高杉桂華 伊藤浄齋 渋谷春好

青黄遊魚 射場少藍 尾原衣香 戸出九廬 梶川久美子

高木龍夢 山本亮子 国方得仙 中島和子 水上健治

中島大夢

「がんばろう東北篆刻展」の開催  
理事長 尾崎蒼石



ゆったりした会場でゆったり鑑賞 (左ガラスケース内に特別展示)

東日本震災からの復興を応援しようとして「がんばろう東北篆刻展」が五月三十一日から六月二日の三日間、岩手県盛岡市の「盛岡市民文化ホール・マリオス四階展示ホール」で開催された。

この企画の発端は、昨年の読売書法展審査時に、審査員、審査係の懇親会の折に話がまとまったもの。全日本篆刻連盟、日本篆刻家協会、岩手篆刻協会三団体により実行委員会を構成し、初の連合展となった。実行委員は尾崎蒼石、東京の中簡堂氏、河野隆氏に加え、地元の堀内青巒氏に決定して進められた。展覧会は、東京から全日本篆刻連盟役員、日本篆刻家協会からは二十九回展出品の理事以上

チャリティで寄せられた遊印の展示頒布



の役員、岩手篆刻家協会は協会員が出品し、合計出品作品数は一五四点であった。併催展として「日本印人の名品書画展」が行われ、独立、心越、細井廣澤、趙陶齋、高芙蓉、池大雅など江戸から現代の四十一人七十五点を展示して好評を博した。



古銅印コレクションの特別鑑賞会

最終日に行われた懇親会には全国各地から百二十人が参加して友好を深めた。当協会から参加したのは尾崎と井谷、眞鍋副理事長、市川、酒居、多田、中島代表理事、長谷川常務理事ほか約二十人であった。この展覧会の目的である東北の復興を支援する義捐金を募るために、各団体から寄せられた遊印百二十余点の展示頒布を会場で行った。得た義捐金で、雄勝硯生産販売協同組合に百万円、岩手県内大学及び岩手県高文連の書道団体に印泥百十個代六十二万三千七百円を助成する支援活動を行った。

全国各地から参加して友好を深めた懇親会



年が改まって賀状に目を通すのは、年末の賀状書きの慌しさを忘れ、心和むものであるが、その賀状、ここ十年木版で文字を刻いたものを作っている。できるだけ手間を省きたいので、単色の一版。それに版画が急に飛んでしまったというのだが、飛ん

青鏡忘録(五)

小朴園

「失敗は成功の元」

思えば篆刻のサビと称して、線を欠かしたり、印面を叩いたりして変化を求めているのに、どこをどの位叩くかが問題で、その事で逆効果になってしまふこともある。それらの味は先人の仕事の中にもあるし、時代が作ったものもある。が、意外にもごく身近にもあるのだ。先の版画ではないが、印泥のつけ具合や押し方によつては、印泥が多かったり少なかったりして所謂失敗の印影になることがある。が、その失敗した印影の中に意外と面白い味があることがある。この印泥のあまりついていない線が面白く効果あるとすれば、常にその状態になるように調整すればよい。荃廬翁の印面を見ると実に細やかな神経で一本一本の線の処理をしていることに驚かされる。荃廬に失敗はないと思われるが、失敗は成功の元ということか。

# 各印社活動 トピックス

## 第二十八回隨風會篆刻展



四月二日～七日  
京都市美術館別館にて開催。七日に中国芸術研究院篆刻芸術研究院の院長韓天衡先生夫妻、常務副院長の駱凡凡先生夫妻、駐大阪中国領事館領事李哲先生の臨席を得て、第一回の隨風會公募展の授賞式を同館で開催した。

山下方亭会長は挨拶で「第一回の授賞式をこの会場に決めたのは、私が書道篆刻を始めた頃は展覽会場の作品の中で受賞式があり、とても臨場感があつて印象に残つたからです。そこで第一回はこの場所を選びました。此の度の受賞者は老壮青と加えて小学生まで揃いました。特に小学生の二人にとっては思ひ出の日となるでしょう」と述べた。

特別陳列には会長収蔵の中国近代作家の篆書軸二十二本、印譜六十九点、刻印三十三顆、青銅器五点が陳列された。又会長蒐集の水差、水滴のオークションを行い一〇八七一五円は全額東日本大震災の義援金とした。

加えて同志社女子大学准教授張莉先生による「説文解字」の講演会を同会場で開催するなど企画が盛り沢山の展覧会であった。(下井嶂葉)

## 第五回 稻香印社展



四月二十三日～二十八日名古屋市民ギャラリー栄第一展示室において開催した。

今回は篆刻・書・陶をテーマに、会員十名が篆刻作品には側拓、書作品は陶印など百二十

点を出品した。特別展示に、先師梅舒適先生の半切書二対、先師神谷葵水先生の書簡、瀬戸の喜多窯霞仙さんより印盒水滴など陶芸作品を展示。多彩で立体感ある会場に、八百八十名の来場者は楽しい篆刻展をみる事ができたとのことでしたが、これに安堵することなく今後一層の研鑽をつまなければ「次は無い」との思いでした。(梶田稲川)

## 第十二回関中印社選抜書作展

関中印社主宰平田蘭石先生と篆刻家協会評議員以上十人による選抜書作展を、六月四日から九日まで関市本町のせき・まちかど工房ギャラリーにて開催した。

会場のスペースから、篆刻・篆書合わせ



て一人三点まで半切三分の一以下とした。遊印も一人二～三点までとし、篆刻・篆書作品二十五点と遊印作品三十七点を展示することが出来た。作品のテーマは自由で、甲骨文字や

金文、漢代の文字を切れる線と余白の美をいかして仕上げた作品等、製作者の個性が表現されたバラエティーに富んだ作品を展示することができ、来場いただいた多くの方の好評を得た。(天野心淵)

## 第三三回 越思篆会篆刻作品展



七月五日～七日富山県民会館で第三三回越思篆会篆刻作品展及び富山市民大学篆刻同好会展の合同展を開催しました。一一八名の出品者で作品の大きさ自由で作品には必ず拓本か水墨画、書を添える条件の基、作品制作をして頂きました。

今年は涼州詞より佛説無量寿經、越中万葉歌、二十四節気等軸物、半切二分の一の額

作品が多く見られ、会場を賑わせた。又共同作品として地藏菩薩十徳、越中万葉百歌、立山七十二峰、越中河川百撰、越中銘酒百撰、百寿、百福等も展示され会場を一層映える篆刻作品でした。

又特別陳列として大村高陵コレクションとして古硯五〇点、古墨五〇本、筆五〇本、古印材一五〇点を陳列し、終日に古硯の説明をもしてお客様、会員の皆様に喜んで頂きました。(大村高陵)

## 第三二回六轡会篆刻作品展

八月二十八日～九月一日京都市文化博物館五階で開催した。

君は見たか、文晁と対峙して黙つたままの井蛙兄の姿を。どれほどの時が経つたのだろう、文晁と語り合った後に自らの作を鈴し、「かな」を書き込む。君は見たか、四君子と呼ぶにはあまりに激しいあの筆致を。豊かな発想力とそれを具現化する刀の技の五雲兄。かくして今年もまた小生の負けだ。



陳列の日に初めて作品を持ち寄り、互いに相手の作を見て、烈しい火花が散る。六轡会は厳しくも、ありがたい会である。(小朴圃)



## 月例作品募集（2014年）

	課 題	出 典	意 味
1月	一清一濁	莊子	あるいは澄み、あるいは濁る。
2月	三心二意	論衡	気持ちや意志が一つに定まらないこと。
3月	上下一心	淮南子	上下の人が心を一つにあわせること。
4月	九野清泰	海録碎事	天下のよく治まって平穏なこと。
5月	二載千秋	本朝文粹	二年も会わないと千年も会わないような思いがする。
6月	五光十色	江庵	いろいろな色が入り乱れて、美しく輝くこと。 転じて優れた人の多いこと。
7月	不同而一	荀子	不同にして同じ。
8月	六合一和	元田東野	世が一つに和合すること。
9月	十謀九成	菜根譚	十計った事柄が九まで成る。
10月	千變萬軫	淮南子	変化極まりないこと。
11月	四時氣備	晋書	人格の円満なこと。
12月	百世不磨	後漢書	百代の後まで磨滅しない。

## 応募要項

- ① 一般は一般を、一般以外は会員 CD を必ずご記入ください。未記入の場合は審査対象外となります。
- ② 印の大きさは一寸以内、用紙は協会指定印箋（篆社印箋も可）
- ③ 応募は各月 1 人 1 点、締め切りは各月末日（消印有効）

送付先 〒563-0032 大阪府池田市石橋 2 丁目 2-10 牧野ビル 203 日本篆刻家協会「〇月課題」係

## お問い合わせ（協会事務所）TEL072-760-3852

平日 9 時 30 分～14 時 30 分 土曜日、日曜日、祝祭日、第 2・第 4 木曜日はお休み（時間内でも所用のため不在あり）

協会への問合せ・各種申込には会員 CD をご記入ください。

◎年内（1 月～12 月）の資格変更はありません。雅号・所属印社の変更は 6 月 1 日～11 月末日に手続き（住所変更は随時）

◎変更・退会をご本人が協会事務所まで書面（FAX 可）にてご連絡をお願いします。（印社代表よりの協会への連絡はない場合が多い）

# 展覧会案内

- ▼齊平篆会(真鍋井蛙)
  - 第一六回齊平展
  - 併催 園田湖城とその周辺
  - 会期 一〇月四日～六日
  - 会場 大阪くらしの今昔館
  - テーマ展示「花字印」
- ▼畦石舎(小朴圃)
  - 篆刻・書・画
  - 第二八回畦石舎作品展
  - 会期 一〇月五日～六日
  - 会場 京都市日図デザイン
- ▼好日会(田中緑翠)
  - 第一八回 好日会 書・篆刻展
  - 会期 一〇月二六日～二九日
  - 会場 中電岐阜ビルパレットルーム
- ▼不華篆会(酒居石荘)
  - デザインとして見る篆刻の展開
  - 不華篆会習作展XXI
  - 「酒」をサブテーマに生活の中の書・篆刻
  - 会期 一〇月二日～四日
  - 会場 伊丹市立工芸センター
  - 同 一九日～二四日に丹波の森公苑で巡回展
- ▼遠邇篆会(伊藤雅夫)
  - 第二二回篆刻と書 遠邇篆会篆刻展
  - 会期 一〇月五日～一〇日
  - 会場 浜松市 クリエート浜松
- ▼黄和会(黄教奇)
  - 第二二回黄和会及び黄教奇書道篆刻作品展
  - 会期 一〇月一九日～二四日
  - 会場 静岡市民ギャラリー
- ▼蒼文篆会(尾崎蒼石)
  - 第一五回蒼文篆会展(創立三〇周年記念)
  - 会期 一〇月二二日～二四日
  - 会場 大阪美術倶楽部
- ▼篆誦社(古溝幽畦)
  - 第六回篆誦社游藝展
  - 会期 一〇月二二日～二四日
  - 会場 アートホール神戸

# 協会行事

- ▼娵輝文会(井谷五恵)
  - 第二〇回娵輝文会書法篆刻展
  - 会期 一二月一三日～一五日
  - 会場 兵庫県民アートギャラリー
- ▼随風會(山下方亨)
  - 第二九回随風會篆刻展
  - 会期 平成二六年四月一日～六日
  - 会場 京都市立美術館
- 第二九回日本篆刻展
  - 五月十四日(火)～十九日(日)
  - 大阪市立美術館
- 第二九回日本篆刻展授賞式
  - 五月十九日(日)
  - ホテル大阪ベイタワー
- 東日本大震災復興支援
  - 「がんばろう東北篆刻展」
  - 五月三十一日(金)～六月二日(日)
  - 盛岡市民文化ホールマリオス
- 第五回日本篆刻家協会
  - 役員展開幕式・実技講習会
  - 六月二十九日(土)
  - 古河市立篆刻美術館
- 第五回日本篆刻家協会役員展
  - 六月二十九日(土)～八月二十二日(木)
  - 古河市立篆刻美術館
- 第六回中央研究会
  - 「中国の古印材・鑑賞と解説」
  - 実技・テーマ「篆書を書く」
  - 八月二十四日(土)～二十六日(月)
  - シーサイドホテル舞子ピラ神戸

# 予定

- 海外交流
  - 西冷印社創設二〇周年記念行事参加
  - 日本篆刻家協会訪中団
  - 一〇月二日月(月)～二五日(金)
  - 上海・杭州・富春江・千島湖
- 常務理事会
  - 二月三〇日(土)
  - 大阪市錦城閣
- 平成二六年度
  - 理事会・総会・新年会
  - 一月三日(月・祝)
  - 大阪ベイタワーホテル
- 第三〇回日本篆刻展
  - 出品締め切り
  - 一月末
- 審査会
  - 二月三日(日)
  - 大阪マーチャングライズマート
- 第三〇回日本篆刻展
  - 四月九日(水)～二三日(日)
  - 兵庫県立美術館王子分館原田の森ギャラリー
- 授賞式
  - 四月三日(日)
  - ANAクラウンプラザホテル神戸
- 第六回日本篆刻家協会役員展
  - 四月二十六日(土)～六月二十六日(木)
  - 古河市立篆刻美術館
- 中央研究会
  - 八月二日(土)～四日(月)
  - シーサイドホテル舞子ピラ

# 編集後記

九月八日日曜日の早朝、日本中が歓喜に包まれました。第三十二回夏季オリンピック大会とパラリンピックの開催地に東京が選ばれた瞬間でした。昭和三十九年以来五十六年ぶりで、アジアでは初めて同一都市で二度目の開催となり、あの感動がまた日本にやってきました。

二〇二〇年が、日本を大きく飛躍させた年だと記憶されるように。未来の子供たちのためになるように。日本のよさを世界に発信し、東日本大震災の被災地にも勇気を届けられる大会になるように。七年後を見据え、五輪開催効果を引き寄せるべく、オールジャパンで取り組みましょう。

八月十二日、高知の四万十市西土佐で日本最高の四一・〇度に達したのは大きなニュースになりました。全国各地でも暑さの記録が次々に塗り替えられ、今年も熱中症が多発しました。

芸術の秋、私たちの季節がやってきました。(S)

編集：会報部  
酒居石荘 榎原晴夫 木村容庸 内田真弓

お気づきのこと、ご意見など事務所までお寄せください。

FAX 072-760-3853 MAIL info@n-tenkoku.jp